

『コバエのブン太』（あらすじ）

超突然変異で生まれたコバエのブン太は、生まれながらにして人間の十歳程度の知恵を持つ。ある日ブン太は風に飛ばされ、近くの小学校の教室に舞い込むが、そこで垣間見た子どもたち（五年生）の生活風景に興味を持ち、毎日通うようになる。あるクラスに転校生の女の子（父親がインド人、名前はマルガリータ）がいて、肌が黒いことでみんなから敬遠されるが、ブン太はひと目ぼれする。そして自分には特殊な能力が備わっていることに気付く。相手に神経を集中させると、感じていることや考えていることが伝わってくるのだ。さらには、自身のほうからも相手に思いを伝えることができる。マルガリータには好意を寄せ交信しようとするが、自分がコバエであることを知られたらと悩む。

折しも学校は、スポーツ大会を間近に控えていた。大会は各学年の四クラスが全学年で組番号毎に合体し、四色に分かれて競う。メインの種目はリレーと大縄跳びで、全員がどちらかに出場する。五年四組には身体的にも知的にもハングドを負った子がいて、どちらにも出場するかをクラス全体で考えることになり、ブン太はこのクラスの動きに関心を持つ。またこの学校には、四組までとは別に五組と称して、通常のクラスに入るのが困難な子どもたちの少人数のクラスがあり、ブン太はこの五組の担任と唯一つながりを持つようになる。そしてのんびりとした雰囲気はこのクラスも気に入る。

この年のスポーツ大会は、全学年で合体した五組が、初めてリレーに参加することになり、また四組のハンデを負った子は、大縄跳びは困難なためにリレーに出場することになった。

そして、スポーツ大会当日を迎える。

おいらはコバエ。名前はブン太。自分でつけた名前だ。

コバエって分かるよね。そう、普通見かけるハエを小型にしたものだ。言うまでもないが、ゴキブリ同様、おいらたちの仲間は人間から嫌われる存在だ。それは十分すぎるくらい承知している。人間にとって不潔だから？まあしようがない。おいらたちには当たり前の生き方も、人間から見ればそうだろう。

昔はおいらたちの兄貴分のハエが、家庭の茶の間を、平気でぶんぶん飛び回っていたと聞く。そして電燈のひもに下げられた、ねばねばの罌にはりつけになったり、ハエたたきなどという野蛮な武器でつぶされたりと、悲惨な終わりをする仲間が、少なからずいたらしい。

時代が進むにつれて、どの家もトイレが水洗式となり、台所も生ゴミが放置されなくなつて、ハエたちにとってはどんどん住みにくい環境になっていった。家だけじゃない、畑だってそうだ。かつては、自分らの尻から出たものを平気で肥料として使っていたのに、今ではなんでもかんでも人工の肥料だ。さらには『害虫駆除だ！』とばかりに、危険な消毒薬まで吹き付けるようになった――人間にとつても毒だろうに――。

やりたい放題の人間のせいで、どこもかしこも、おいらたちが安心して生活できる場ではなくなつてしまった。会いたければ――ハエに会いたがるなんて物好きもいまいが――、よほどのゴミ屋敷か、養豚場あたりへ行くしかあるまい。

それにしても、人間というのはなんと身勝手な生き物であることか。自分たちにとつて無害で、しかもいとおしさを感じる動植物に対しては、『絶滅危惧種』などと言って大事にしたがる。ところが、ハエやコバエに対しては、まったく意に介さない。それどころか、絶滅させようとしている！

えっ、おいら、お前はどこで生まれたかつて？ おいらはね、そのキャベツ畑のすみのほうに、ほら、何やらうずたかく積まれた小山があるだろ。あれは商品になりそこねた野菜たちが捨てられてできた山よ。あの山の下の方はな、安全だし栄養たっぷりで、おいらたちの高級な繁殖地ってわけだ。ハエに限らずいろんな生き物がいてな、みんな快適な日々を送っているよ。ただ、やたら気分やの人間のせいで、いつくずされるか知れたものではない、という不安を抱えるがな。

五ミリほどしかないおいらのようなコバエが、なぜこうもべらべらしゃべるかって？そりや不思議だよな。自分だって信じられない。ただよ、百年ほど前

に、しゃべる猫が物語りに登場して話題になったというじゃないか。猫にそういうことがあるんだったら、コバエにだってあったとしても、天地がひっくり返るほどのことでもあるまい。ただな、超の上にさらに超が何個もつくような超・超・超突然変異が起きたらしい。まあ何万年も何十万年もハエの歴史を繰り返せば、こんなことが起きることもあるんだろう。難しいことはおいらには分からないけどな。

おいらは生まれながらにして、どうやら十歳程度の人間の知恵があるらしい。文章はどうやって書いたかって？それはおいおい分かっていくことさ。猫の場合はどうだったか知らないがね。

さて、おいらはコバエのせいで、兄貴分のハエと比べたら、人間どもに見つかり追い回される危険はかなり小さい。ところが、その軽さがあだとなることもある。春先ののどかな陽気をキャベツ畑で満喫しているときなど、ちよつとした予期せぬ風のいたずらで飛行感覚を失い、向かう方向はまさしく風任せで、思わぬところへ瞬間移動してしまうことがある。今回そうしたちよつとしたハプニングが、これから始める物語のきっかけとなったのさ。じゃあ始めるよ。

網戸の無い窓なんて、今どき学校くらいしかないんじゃないか？おいらはキャベツ畑をのんびり飛行していた折、突然の春風に巻き上げられ、さらに吹き飛ばされて、通り一つ隔てた小学校の教室へ、瞬間移動してしまった。おいらにとっては不意打ちだった突風も、幸い人間どもには大したことではなかったようで、目ざとい子供たちと言えども、おいらの突然の侵入に気付く子はいなかった。行き場をさえぎられた教室で、飛行感覚を取り戻したおいらは、とっさに廊下寄りの天井の一番後ろに張り付いた。

小学校らしきものが道の向こうにあるのは知っていたが、わざわざ様子を見に行こうかなんてことは、一度も考えたことはなかった。何か戦利品でも期待できるのならともかく、あの工場のような味気ない造りからは、うまそうなものもありつけるなんて、とうてい想像できなかった。西の方角に広がる住宅街を目指したほうが、よほど安定したチャンスに恵まれる。今どきはハエ対策の充実した家がほとんどだが、まだまだ狙える家があるものだ。

教室に突入する直前の、半ばめまいを起こした状態でのおぼろな視界を思い返すと、ここは道路に沿った校舎の二階で、一番東側に位置する。教室の中には四十人近くいるだろうか。男の子、女の子が雑然と一応列をなして座り、前にはメガネを掛けた年配の女の先生が本を片手に、黒板に書かれた図を指さしたり、こちらを振り向いて声を張り上げたりしている。先生の話そっちのけで、前後ろや隣どうしでヒソヒソやったり、突付きあったりするペアが三、四組。

ポーンと畑の方を眺める窓際の子が二人。時計ばかりが気になる子が四、五人。いつものことなのか、昼が近いからか、先生もなかなか大変だ。

黒板には、正方形と円の図が描かれていて、斜線の部分の面積を求めようとしているようだ。少し壁を伝って降りると、ガラス戸越しに廊下が見え、前の入り口あたりに「五年一組」の札が掛かっている。五年生にしては大した問題ではない。算数が得意なおいらなら簡単に解けそうだ。

「全員が解けたら終わりにします」

先生がそう言うと、みんなあわてて下を向き取り掛かった。黒板の上の時計を見ると、十二時七、八分をさしている。黒板の右の時間割表では、四時間目の授業が十二時十五分までとなっている。そしてそのあとが・・・、給食。そうか給食だ！その時間になると、教室中に食べ物があふれる。なんで今までそんなことに思い当たらなかったのだ。味気のない工場のような風景から、小学校がこんな魅力的なところだとは思ってもしなかった。『給食だ！給食だ！』おいらは思わず叫んでしまった。勿論人間の子どもたちには聞こえるわけがないが。

はしたなくはしゃいでしまったが、まだ少し時間はある。気を取り直して子どもたちを眺めた。後ろ姿から分かる。いかにもチンプンカンピンといった子が六、七人はいる。解けそうにない子はどうするのだろうか。どう思っているのだろう。ひとりでも解けなければいつまでも終わらないのか？この授業。自分が足を引つ張らなければ、早く終わるのに・・・。そう思って気を重くしている子もいるんだろうな。一人は全体を気にしなければならぬの？ふと、つぶやいてしまった。『これって全体主義じゃないの？たまたま少しばかり算数が苦手な子を、そんなふうに追い詰めていいの？ねえ、先生』

「分からない人は声を掛けて、ヒントをあげるから」

そう言うと、先生は列の間を回り始めた。それで分かった。先生は全員の出来具合をチェックして回るのだ。つかえている子に何やら説明している。『全員が解けたら』の意味はそういうことだったのか。おいらの早とちりだった。『ごめんよ、先生』おいらは思わず声に出した。先生には聞こえるわけがないが。

先生の計算通りだ。ちょうど教室中を回り終えるあたりで、時計の針が十五分を指した。ところが最後の一人でつかえてしまい、廊下でチャイムの音が響き渡った。隣かまたその向こうか、子どもたちがいつせいに廊下に飛び出し、大変な騒ぎになった。

「ちよっと待って！」

先生が騒ぎに負けない大声を出した。

「先生、もうチャイムが鳴ったんだから終わりにしてよ」

一番後ろの真ん中あたりで、先ほどらい前の子の背中をしきりに突付いていた体の大きな男の子が、先生に負けないくらい大きな声で怒鳴った。

「近藤君、少しくらい待てないの？あなただって人を待たせることがあるですよ」

先生が顔を上げないままで言った。

「無いね」と近藤君。

「あっ、そう、分かったわ。近藤君、覚えておきなさい。近藤君は人を待たせることが無いのね？」

また近藤君が何か言おうとすると、先生が言った。

「いいわ、じゃ終わりにしましょう。気を付け！礼！はい、おしまい」

近藤君が何かぶつぶつ言ったようだが、じきに大変な騒ぎにかき消されてしまった。『さあ、給食だ！』おいらと子どもたちの何人かがいっせいに叫んだ。いや調子に乗ってはいけない。何しろ子どもというのは目がいいし、特に虫を見つけるのは得意だ。おいらはまた、天井のすみの一番目につきにくいところへ移動し、子どもたちの動きを観察しながら作戦を練ることにした。

エプロンとキャップとマスクを付けた何人かが教室から出て行き、残った私たちは、おりからいっせいに解き放たれた小猿たちのようにはしやぎまわる――小猿に対して失礼な言い方だったか――。彼らの目には見えないのか？このほこりが。おいらは勿論意に介さないが、彼らはこんな空気の中で食事をするというのか。なんとも無神経な連中であることよ。先生はまだ最後の子に説明している。やはりみんなを待たせなくてよかったか。

今日のメニューは何か？廊下のほうから何やら甘い匂いがし始めた。何しろおいらたちの嗅覚は、人間どもの比ではないからな。給食を取りにいった連中が戻ってきたらしい。マヨネーズの匂いもするぞ。肉じゃがのような煮物とマヨネーズ和えのサラダを見た。なんとラッキーなことか、どちらもおいらの大好物だ。『春の風さん、ありがとう。もうあんたを頼らずとも、ちよくちよく足を運ぶ、いや羽をばたつかせることにするよ』

係の子たちが配膳台で盛り付け、列をなした子たちがお盆で受け取る。どの子もこれから口に入れるものにほとんど神経を奪われている、ここがチャンスだ。おいらは一旦廊下に出て、前の入り口から低空飛行で入り込み、配膳台の下に着地する。まさしくおこぼれちようだいというやつだ。ドジな配膳係の盛り付け損ないを期待しようというわけだ。ところがどうしたことか、待てども待てども、一滴の汁もひとかけらのサラダもこぼれ落ちてこない。おいらはさすがにちよつとあせり始めた。頭上ではこの上なく魅力的な匂いが渦巻いてい

るといふのに。このおいらにはほんの一滴、ほんのひとかけらで十分なんだけど。ああ、何もこぼれてこない。

もう配り終えそうだ。しょうがない。『いただきます！』の号令がかかったあとで、配膳台の上を狙うとするか。腹が減り、狙ったようにはいかず、体中あせる気持ちでいっぱいになる。しかしあせりは禁物。考えが足りないがために命を奪われた仲間や兄貴分は、いくらでもいる。まずは配膳台にはい上がって、子どもたちからは見えない食缶や食器カゴのかげをあたろう。

だが、なんとしたことか、見える範囲には何も無い。がさつな小猿にしか見えなかった連中が、それぞれ四年以上の経験を積み重ねたせいも、すくなくとも見える範囲には何もこぼすことなく、全員に配り終えていた。

『ええい、もうこうなったら』おいらはやけを起こしていた。パツと舞い上がり、肉じゃがの食缶の中に突入した。そのとたん、

「あ、ハエだ、チビハエだ！」

食缶が一番近い席の男の子が叫んだ。『チビバエじゃあない、コバエだ』おいらが叫ぶ。

「食缶に入ったぞ！」

「汚ねえ、つかまえろ！」

「外へ出して、たたきつぶせ！」

三、四人の男の子たちが飛んできた。おかわりを狙っている子たちなんだろう、すごい剣幕だ。おいらは子どもたちの手が到達するより一瞬早く、彼らの届かない高さに舞い上がり、天井を伝うようにして窓から飛び出た。簡単にはつかまらない自信はあるけど、敵が子どもとは言え三人四人ともなると、ちょっとあわてた。

『ああ、それにしてもあんなごちそうを目の前に行っていないながら、とうとう味見することすらできなかったとは・・・』窓枠の上に隠れて、しばらくは落ち着きを取り戻すことにした。

もうこの教室は危険だ。また戻って来はしないかと、意識化された八十近い目で、教室中いたるところ監視されている。隣にもまたその向こうにも教室はいくつかあるし、どこもメニューは変わらないはずだ。

それはそうと、今しがたおいらは、これまで経験したことがない不思議なことを感じた。あれはなんだったんだろう。おいらを見つけて第一声を発した子に対して、とっさに神経を集中させたとき、『なんだ、こいつは！きたないやつめ、食べるものにたかるんじゃない』そんな音声ではないセリフが、耳からではなく頭に入り込んできた。まるで発信元がはっきりしたインスピレーションのようだ。そういうえば、その前のあの先生の時もそうだった。「全員が解

けたら」と言って教室中を歩き始めるとき、おいらは先生に注目していたと思うのだが、そのときもなにやら『時間の終わりまでに全員できるかな』そんな声が聞こえてきたような気がした。あのときすんなり先生の意図が読み取れたのもそのせいだ。

おいらは今まで、人間をこんなふうにしつくり観察することはなかった。『ひよつとすると、おいらには特殊な能力が備わっているのかもしれないぞ。おいらがある人間に神経を集中すれば、その人間が感じていることや、心で発していることを受信することができる。うん、多分そういうことなのだろう』おいらは、突然変異で得たおいら自身の能力のすごさを、改めて感じた。

外壁を移動し、隣の教室――並びからして『五年二組』――の様子をうかがった。全員が食べることに集中している。ときおりふざけあつたり笑い声がしたりはするが、まあどの子も外界に向けての神経の集中度はゼロに近い。おいらは一番後ろの窓枠から入り込むと、後ろの壁を目指し、さらに教室中が見渡せる高さまで這い上がった。

廊下側の一番前に若い男の先生が座り、一組と同じようにかろうじて列を成してはいるものの、あちこち机どうしがくつついたり遠ざかったりしている。ところが雑然とした中にあつても、一箇所ちよつと不自然な机の配置が気になった。一番窓側の後ろから二番目の席が、一つ取り残されているという感じなのだ。その席だけ前後と右側に、ちよつと意図が感じられる距離が空けられている。その席の子は女の子で、後ろから見える首筋と右腕の肌の色が、他の子よりも明らかに黒い。日に焼けた黒さではなく、持って生まれた肌の色だ。色のこさと光り具合からしてインド人と見た。両親が、あるいは両親のどちらかがインド人ではなからうかと思われる。間の空き具合がそのせいだとすると、なんとも悲しくなってしまう。本人もかわいそうだが、距離を置いている子たちの心のもち持ちようが情けない。日本に生きるコバエとして、誇りに傷がつくというものだ。

おいらのような部外者が一目で感じるのだから、先生は当然気がついていないはずだ。どうして何とかしようとしなのだろう。人間社会でときたま耳にする『見て見ぬ振り』というやつか？子どもたち一人ひとりに神経を集中させると、女の子のことや、彼らが女の子に対して感じていることが、いろいろ分かってくる。おいらが想像したように、父親がインド人で母親が日本人。女の子は昨日この学校へ転校してきた。名前はハナダ・マルガリータ。生まれたのは日本だから勿論日本語は分かる。

『どんな子かよく分からないなあ』『色の黒さが気になるなあ』『なんとなく近寄りやすい』『あんまり近づくと黒いのが移りそうだ』……。『えっ！』あま

りの幼稚さにおいらはあ然とする。

『他の子はあの子のこと、どう思ってるんだろう』『やたら声を掛けたりしたら、みんなから変に思われるかなあ』『話しかけたら、いやがるかなあ』『かわいそうだなあ、誰かがなんとかしてあげないと』……。そういう子たちもいる。みんな口に出そうとしないから、お互いどう思っているかが分からないでいる。口に出して話しさえすれば、すぐに分かり合えるだろうに。

おいらは女の子に神経を集中させた。女の子は放心状態なのか何も発してこない。かすかに右手は動いているようだが、あまり食事は進んでいないようだ。ひよっとしてと思い、おいらは女の子に神経を集中させて、こちらから思いを発信してみた。相手から思っていることが伝わってくるのだから、こちらからも相手に届くかもしれない。

『マルガリータ、今どういう気分？』

マルガリータの右手が、一瞬止まったような感じがした。耳から誰かに言われたのではなく、ごく自然に自分の頭の中で、ことばにしてみようという気持ちになったみたいだ。『すごい、つながったぞ！』やはりこちらの思いが届いたようだ。

『こんなことになるとは……。気軽に話せる子ができて、楽しくやれるかなと思っただけど、やっぱりこんなふうになってしまったか。これから先もずっとこうかなあ。もっといやな目にあうのかなあ。ああ、どうしよう。どうしたらいいんだろう』

おいらが先生に向かって神経を集中させようとしたそのとき、先生がやおら立ち上がって話し出した。決して意気込んでではなく、軽く語りかけるような調子だ。

「食事中だけどさ、食べ終わってばらばらになる前に話したい。僕は今この教室の様子を見ていて、どうしても気になってしまう。みんなの中にも多分同じように感じている人がいると思うんだ。マルガリータの席の周りのことだよ」先生がそう言うと、みんながいつせいに彼女のほうを見た。マルガリータは箸を置き、右手を下げ、一回りも二回りも体を小さく縮めた。

「菅野、どう思う？」

先生のすぐ後ろ——つまりマルガリータからは一番離れた席——の菅野という男の子に問い掛けた。本人も他の子も当然、何故？と思ったに違いない。菅野君は、

「何故俺に聞くのさ。席を離している奴に聞かないで」

先生はそれには答えず、

「じゃあ、西尾、君はどう思う？」

菅野君の後ろの女の子に声を掛けた。西尾さんは、なんて答えていいか迷っているようだ。わざわざ一番遠い席の子に聞く先生の意図は何かと考えているのだろう。なかなか答えられない。先生はじっと待つ。西尾さんは下を向いたままだ。

「みんな、一人ひとり自分の問題として考えて欲しい」

先生がそう言うと、後ろのほうの男の子が、少しふてくされたような強い調子で言った。

「先生さあ、そんな大事なことだったら、こんな食べてるときじゃなくてさあ、帰り会のときにでもしたらどお」

「そうだ、そうだ」という声が二、三上がった。しかしそれ以上には支持者は出なかった。

「僕はね、教師になってまだ経験が浅い若造だけどね、こういう状況だけは教師として絶対に見過ごせないんだよ。授業中は気にならなかったけど、給食になってどうしてこういうことになったんだろう。たまたま席が近い人たちだけの問題ではないよね。クラス全体の問題だ。今この場でみんなで考えなければって思っただよ」

そのとき、思いもよらないことが起きた。マルガリータが立ち上がったのだ。

「先生、いいんです」

「いいって、何がいいんだ？」

先生が驚いたように言う。

「私が一番後ろへ行きます。そうして少し離れば、不自然でなくなります」

マルガリータはそう言って立ち上がり、机と椅子を引きずるようにしながら通路の間を移動し始めた。みんなあっけに取られて眺めているばかりだ。移動が終わると、誰が言うでもなく空いていた間が締められ、マルガリータの席が一番後ろでぼつんと一つ離れた状態になった。

先生がマルガリータの近くにやってきた。

「マルガリータ、君は本当に勇気のある子だね」

先生は体にも声にも力を込めてそう言って、ニコツと笑った。マルガリータは下を向いていた。先生は、『もう大丈夫、この先きつとうまくいく』そう確信したようだった。

みんなまた給食を食べ始めた。マルガリータも先ほどよりはいいペースで箸を動かしている。気がついたら、何も口に入れられていないのはおいらだけだ。先生の思いが伝わってきた。

『人間どうしようまくいくには——たとえ子どもの世界と言えども——やはり時間が必要さ』

おいらはマルガリータの椅子の、背もたれのところにとまった。これより後ろに目は無いから心配は無用だ。

『先生が言うように、君は本当に勇気のある子だね』

おいらが発信するとすぐに返ってきた。どうやらマルガリータは、積極的に人と関われるタイプの子のようだ。

『そんなことないわ。でもね、お父さんからこんな話を聞いていたの。お父さんが電車に乗って空いた席に座ると、その両隣に誰も座ろうとしないことがあるんだって。席が無くて立っている人が何人もいるのに。そんなときお父さんは席を立つんですって。自分がいなければ三人座れるから。お父さんが言うには、日本人は色の黒い人に慣れていないんだろうね、って。日本人にも勇気のある人や、勇気なんか関係なく普通に振る舞える人はいくらかいるから、少しくらいいやな思いをしても、やけを起こしちゃだめだぞ、って』

おいらは窓枠に移り、ぎりぎりまで前に出て、マルガリータの横顔を盗み見た。目鼻立ちがきりつと整っていて、なんとかかわいいことか。肌は黒くつやつや輝いている。おいらはひと目で気に入ってしまった。『ああ、コバエなんかじゃなくて、人間の男の子だったらよかったのに！』

つい調子に乗って、マルガリータをもっとよく見ようと、そうとう前のほうに移動してしまっていた。マルガリータが「あらっ」と言い、手の平であおぐようにして、おいらを窓の外に追い払った。幸い『ハエ』というセリフを言わなかったので、他の誰も気がつくことはなかった。おいらは、思いを寄せる女の子にふられたような気分になり、悲しくなってしまった。『なんでおいらはコバエなんだ！』

結局この日、心踊るような給食という場面にそうぐうしながら、一滴もひとかけらも我が物とすることができず、それどころか味見することすらできなかつた。『惜しいことをしたなあ、肉じゃがとマヨネーズ和え・・・』

それにしても小学校って面白いところだ。いろんな子がいて、いろんなことがあって。先生もいろいろいるみたいだし。明日も来てみるか、給食はあまり期待せずに。

おいらはいつものように、西の住宅街を目指した。キャベツ畑が尽きると、新たに白いビニールのかまぼこ状のトンネルがいくつもできていた。中をのぞくと、若々しい苗が規則正しく植えられている。この季節からして、どうやらイチゴらしい。おいらは有頂天になり、『ブン、ブン、ブン』と歌いながらトンネルを通過した。ケーキにのせられたイチゴなんてまず無理だろうけど——一生のうちにそんな幸運に恵まれるハエなどめったにいない——、『ああ、あこがれのイチゴだ。ここには山ほどできそうだ。実が成るのはいったいいつこ

るだろう。成り立てのイチゴ、楽しみだなあ。それまでは何とか生き延びねば……』

翌日、おいらはいつもどおりに昼食を済ませ——ちなみに今日のメニューは、サンマの蒲焼ときゅうりの浅漬け、それにオレンジジュース。どうやって手に入れたかって？それは想像にまかせるよ——、午後の時間に行ってみた。一組はあのメガネの女先生が社会の授業をやっていた。地理らしい。子どもたちは机の上に教科書と白地図と色鉛筆を並べている。白地図にくにかくにやした線がいくつか書きこまれていて、子どもたちはその線を慎重に、ある子はかなりぞんざいに、水色のエンピツでなぞる。線が海に流れ出たところに四角いマークがあり、川の名前を書き込むようになっていいる。

「みんないいかな、次のページにいくわよ」

先生がそう言うと、前のほうの男の子が「早いよ、先生！」と言った。そのとき、後ろのほうから「そうだよ、ちよつと待ってよ、先生！」の声がした。昨日の近藤君だ。本人も先生も、他の何人かの子たちも気が付いたようだ。くすくす笑いが起きた。先生は顔を下に向けたまま、眼鏡越しに上目使いで、近藤君に鋭い視線を送った。あわてたのは近藤君だ。

「そんな、本気で待って欲しいなんて言ったわけじゃないよ。自然な掛け声みたいなものだよ。いいよ、先生、どんどん先へ行って」

「いいえ、まだの人を置いたまま先へ進むわけにはいきません。どうぞ、落ちて置いてやってください。できたら教えてね」

ここは完全に近藤君が一本取られた。本人も笑った子たちもみなそう思ったようだ。先生はその後お説教じみたことは何も言わず、たんとと授業を続けた。

二組に移動した。マルガリータは昨日の最初の席に座っていた。

『よかった、よかった』右隣も前後も自然な間だ。やっぱり子どもたちはすごいなあと感心する。大人の世界だったらこうはいくまい。おいらは、窓枠の一番いい角度でマルガリータを観察できる位置から、頭を半分出してうっとりしながら見続ける。

授業は理科で、あの『若造』先生が太陽系の話をしていた。黒板の真ん中あたりに赤い円があつて、それを中心とする大きな円が描かれ、その上下と左右の四箇所青い小さな円がある。そして教卓には大きな地球儀がのっている。「地球儀って、必ず回転する軸が傾いているよね」

そうやって、先生は指先ではじくようにしてくるくる回転させた。

「どうして傾いているのか、この傾きは何を意味しているか分かるかい？」

すると、ある男の子が言った。

「本物の地球が傾いているからでしょ」

「その通り。だけど、我々が暮らす地上の話なら、上下や左右があるから傾きの意味はすぐに分かるけど、宇宙の場合は上下や左右がない。それじゃこの傾きは何に対する傾きか」

『そんなこと分からないかなあ。あのだ円軌道を含む平面に対する傾きじゃないか』

先生は四個の青い円に、それぞれ同じ傾きで団子の串のように短い棒を書き入れた。地球儀の傾きと同じような角度だ。

「分かるね。地球が回転している面に対する角度だ」

「そんなんだつたらみんな分かってたよな」

先ほどの男の子が言い、みな「そうだ、そうだ」と、声を合わせた。

「それじゃあ、この傾きがどれくらいの角度で、その傾きが何故生じたか知ってるかい」

『おっと、それはおいらも知らなかったな。ここはちよつと話を聞いてみることにするか』

「太陽系に地球が誕生したときは、回転軸はこの面に対して垂直だった。もし地球がそのままの状態で今に至っていたらどうなったと思う？」

そう言って先生は、地球儀の回転軸が垂直になるように立て、ゆっくりくるくる回した。

「窓からの明かりが太陽の方向だとするよ。赤道上では一年中真上に太陽があり、南極、北極は一年中ほとんど太陽の光が届かない。どの地点も一年中同じ陽気で、おそらく人間が暮らせるのは、北側と南側のある幅の帯状の地帯だけだったろうね」

『そうか、それは考えてもみななかった。じゃあ何で傾きが？』

「地球が誕生して今のような安定した天体に至る前に、何回か他の天体が衝突して、その度に回転軸が傾いたそうなんだ。二三・四度という、これほどの偶然があるかというような絶妙な角度にね」

『なかなか感動的な話だ』

子どもたちも珍しく静まり返って聞いている。このあと先生は日本の四季の話をし、地球儀をくるくる回しながら、赤道に近いインドや北欧の国々などの話をした。

おいらは先生の話そっちのけで、マルガリータに見とれる。

『いいなあ、マルガリータ。おいらの理想の女の子だよ。幼稚な男の連中には、君のすばらしさはとうてい分からないだろうな。口では発しない心の語り合い

で、おいらの良さを分かってもらえたとしても、おいらがコバエと知ったら、——ああ、なんとという悲劇——。読者諸君、ここはけっして笑うところではない！』

次に 隣の三組をのぞいてみることにした。

今までにない光景だ。列はびしつと整えられ、話し声など勿論無く、一人の子が立って教科書を読み、他の子たちはみな机に立てた教科書の字を追っている。おいらは先生が見える位置に移動した。先生は教科書を片手に持って、教卓の脇に立っている。五十歳くらいだろうか。地味な灰色のスーツを着て髪型もびしつと決めていて、体全体にすぎが無い。身なりのみならず、表情もそうだ。これから試合に臨む女性剣士のようだ。

後ろのほうの、他のクラスにいたら目だったことをしそうな一人の男の子に、神経を集中させた。

『こういう授業で楽しい？』

最初は戸惑っていたようだが、やがて返ってきた。

『楽しいわけではないだろう』

『みんなずいぶんいい子にしてるね、先生が怖いから？』

『いろいろヤバイことになるのさ』

『ヤバイこと？』

先生を見ると、この男の子の方に視線を向けている。男の子の上の空を見抜いたか。おいらはあわてて発信した。

『まずい、先生が見てるぞ！』

事無きを得た。それにしても、なんと鋭い観察眼を持った人間であることか。ひよつとすると、若い頃本当に全日本クラスの女剣士だったのかもしれない。特に女性の剣道家や空手道家は、一目見てその風ぼうや雰囲気から、どの程度の強さが分かる。おいらがやたら生徒たちにちよつかいを出すと、不幸を招きかねない。ここはひとまず退散するでしょう。

(このクラスにちよつとした出来事が続けて起きる。それはもう少し先へ行つてから)

そのまた向こうの四組へ移動した。どうしたことか窓がすべて閉められている——おいらが入り込むくらいのすきまは簡単に見つけれられたが——。そのわけはすぐに分かった。今の三組とは雲泥の差——いや、どちらが良くてどちらが悪いと言う意味ではなく——、とにかく大違いだ。六、七人ごとの六つのグループに分かれて机を寄せ合い、ああだこうだとやり合っている。なんという騒がしさ。寄せ合わせた机の真ん中に、図書室から借りてきたらしい何冊かの本を積み、グループごとに何かをまとめようとしているらしい。どうやら、各

班ごとに分担した地域の産業について調べているようだ。

担任は二十代後半くらいの子の先生で、騒がしさを制御しきれずに困惑しているようだ。時折「ねえ、もう少し静かにやって」と言うのだが、ほとんど効き目が無い。教室全体を見渡すと、あちこちのグループに、こうしたやり取りに入り込めていない子がちらほらいる。そのうちの一人、見るからに卒業後は有名私立中学へでも進学しそうな顔つきの、メガネをかけた男の子が、腕組みをしながら顔をしかめている。神経を集中しようにも、この騒音状態では無理がある。いや、仮に交信が可能だとしても、ちよつと気が引ける。とにかくおいらの頭とは、出来具合にかなり差がありそうだ。おいらからの発信を不思議がり、何事かと追求してくるかもしれない。

(この『私学ねらい』の男の子——おいらが勝手に決めつけた——が、意味深い一言を発する。これももつと先へ行ってから)

やがて終了のチャイムが鳴った。やかましい連中が教室からとび出していき、授業中よりも静かになった。おいらは、やはりグループの話し合いに加わっていなかった、何人かの子と交信してみることにした。窓枠に身を隠し、神経を集中させた。まずは男の子。

『ねえ、どうして参加しないの?』

はじめはきよんととしていたが、何回か繰り返すと、乱暴な調子で返ってきた。

『つまんないんだよ、あんなもの。ちつともやる気がしない』

『じゃあさ、どういうのだったら面白いのさ』

『どれもこれも面白くないね。こんなこと勉強して何になる』

『ふうん、学校の授業だから?学校以外のことだったら何か面白いことあるの?』

『ゲームだね』

『そうか、やっぱりね。できるものなら学校へ来ないで、家でゲームばかりやっていたい?』

『当たり前だ』

『それじゃ、どうして学校へくるの?だれか友達がいるから?』

『そんなもんいるわけがない。親たちがうるさいのよ。そんなにゲームをやりたいんだったらゲーム機もって家を出て行け、だ。俺みたいな子どもが一人で食ってけるわけがない。まったくめっちゃくちゃな親だ。ところでだれだ?さっきから俺にごちゃごちゃ言ってくるのは』

『誰も何も言っていないよ。君が勝手にひとりごとを言ってるだけさ』

『ひとりごと?』

『君がやってるのと同じゲームが好きな子を見つけて、情報交換でもしてみたら』

『ほら、また誰かが何か言った』

おいらは『じゃあね』と言って、次の子にあたることにした。

『今の授業面白い？』

女の子はあたりをきよろきよろ見回す。間を空けずにおいらは続ける。

『面白くなさそうだったよね。今の授業』

女の子は何も返そうとしない。沈黙したままだ。

『そうか、面白くないんだ。他の子とうまくいってないの？』

『・・・』

『ふうん、何にも感じてないんだ』

『そうじゃないわよ！』

女の子が胸の内を吐き出し始めた。表情にも表れたが、他の子たちには何が起きているかは分からない。

『まったくみんな、どうしてこうもふざけたがり屋なの。まじめに考えるときはまじめにやってよ。今の授業だってそう。くだらないこと言ってみんなを面白がらせると、その子をみんなではやし立てる。そして、もっとくだらない面白がらせること言って受けようとする。だからって、何か言おうものなら、なんだこいつはって、いやがられる。こういう連中がサッカーのワールドカップかなんかで、街でバカ騒ぎする人間になるんだわ。少しは考える人間になつてよ』

『そうか、そういうことだったのか。確かにあんな状態じゃ、入っていきこうという気になれないよね。他に君のように感じている子はいないのかな？』

『いるわよ、多分。頭では考えていても、仕方なく雰囲気にはまってる振りをしてる子もいるだろうし』

『何かいいきっかけがあるといいね。みんながまじめに考えるような』

『そうね・・・』

そうやって女の子は送受信を絶った。

そしてもう一人の女の子。

『学校は面白い？』

『だーれ？』

『だれでもない。姿形が見えないだろ。だから誰でもない。君の心の内を自由に話していいんだよ。もちろん口に出すことは無い。思うだけでいいんだ』

『ふーん。学校は面白いかって？面白かったらもっと楽しそうな顔をしてるわよ』

『そうか。授業が面白くないの？楽しくできる仲間がいらないから？』

『今みたいな授業は大っ嫌い。私って他の子たちのように調子よく振る舞えないのよね。無理にやればわざとらしくなるし、黙っていると、こいつ何考えてるんだって思われちゃう。私がつらい思いでいるなんて誰も気付きっこない』

と、ここで始業のチャイムが鳴った。

『そう。でも、調子よく振る舞っている子でも、君のようにいやだと思いがら、無理をしている子もいるんだろうね』

また騒がしさの始まりだ。もうこれ以上の交信は無理だ。

次はホームルームの時間だ。『何か話し合いでもするのかな？』お調子者の代表のような男の子が前に立ち、落ち着いた感じの女の子が、チョークを持って黒板の前に立った。

「今日はスポーツ大会の選手決めをするぜ、いいかな！」

七割ほどの子たちが「いいとも！」と反応する。この子たちこそ、こういう雰囲気を不快に感じる人間もいるんだという人の気持ちを読めていない。自分は大勢を占める側でいれればいいと、何も考えずに決め込んでいる。

『まじめにやれ！』

良くないこととは思いつつ、思わずおいらは、誰に向かってというわけではなく叫んだ。一瞬前の方の騒がしい連中が静まり返り、互いの顔を不思議そうに見合っている。

「どうしたの？大矢君」

黒板の前の女の子が声を掛けたが、大矢君はまだきよろきよろ辺りを見回している。女の子が続けた。

「種目は例年通りです。午後の種目のクラス対抗リレーと大縄跳びがメインで、全員が必ずどちらかに出ます。午前は、全員のボール送りと、男子は綱引き、女子は綱取りです。得点も例年通りです。リレーは一位から六十、四十五、三十、十五。縄跳びは二分間の間に一番長く続けて跳んだ回数掛ける二。他の種目は二十、十五、十、五、です」

やっと大矢君が口を開いた。

「例年通りだからいいよね。今日はリレーの十二人と大縄跳びの分け方を決めるよ」

大矢君がいつもと少し違う大矢君になって、違和感を抱いている子も少なからずいるようだ。はたしてこの雰囲気がいままで続くことか。『それはそうとこの学年のクラス数は四？教室の数からして五クラスかと思ったけど・・・』

リレーの選手は、普通であれば立候補とか推薦とか、あるいは機械的に早い者から順にというように決めるのだろうか、このクラスにはある特殊な事情が

あった。前川君という生徒の存在だ。前川君は健常な子に比べて、肢体がやや不自由であり、知的にも少しハンデを抱えている。だが走れないわけではないし、人の話を理解できないわけではない。顔中をくしゃくしゃにしながら、口を思い切り動かして言いたいことも言う。不明瞭でとてもゆっくりだが・・・ただジャンプするのは難しそうだ。かと言って精鋭が集まるリレーに出るのは考えにくい。リレーの選手は男女六人ずつだ。どういう話し合いの結果になるのか。

前川君をどちらに回すかの話し合いになった。前川君は例によって、顔をくしゃくしゃにして——これが前川君の笑い顔であることが分かってきた——、みんなの意見にうなずいている。

「前川、ちよつと」

大矢君が前川君を後ろのスペースに連れて行く。そして両手を取って言った。「いいか、前川。俺が『ジャンプ！』と言ったら一緒に跳び上がれよ」

大矢君が「ジャンプ！」と掛け声を発して、前川君の両腕を引き上げるようにして思い切りジャンプする。前川君が足をばたつかせるように全身に力を入れる。前川君の両足が同時に空中に浮かぶ時間は、わずかにしかなかった。両足の動きが同時でなく、力の入れ方がうまくかみ合っていない。二人は三度同じことを繰り返した。

「だめだ、これは。無理、無理」

大矢君が前に戻って「どうする？みんな」と言うと、一人の女の子が立ち上がって言った。

「ちゃんと練習すれば、もつと跳べるかもしれないわ。誰だってそうでしょ。練習するからうまく跳べるようになるでしょ」

おお、あの子だ。『サツカーのバカ騒ぎ』の女の子だ。おいらは思わず両手——実は二本の前足——で拍手を送る。勿論誰にも聞こえっこないが。

「前川を一度走らせてみようよ」

一人の男の子が言った。

「そうだな、ジャンプと走ると両方見といたほうがいいな」

大矢君はそう言うと、前川君を連れて廊下に向かった。

「えっ、今走るの？廊下を？他のクラスもホームルーム中よ」

「先生、騒がないでやれば大丈夫だよ。時たま走るやつもいるんだしき（どういうことかは先へいくと分かる）。迷惑にならないようにするから大丈夫。いいか、みんなは廊下へは出るなよ」

そう言うと、大矢君は前川君を連れて廊下の端まで行った。子どもたちは、前と後ろの出入り口のところに黒山になる。大矢君の合図で二人は走り始めた。

前川君は頭をハトのように前後させ、いかにも余計な力が入ったように体をくねらせ、右腕を振り回す。両足の動きはバランスを欠いている。それでもジャンプから想像したほど遅くはない。大矢君は疾風のごとく教室の前を走りすぎた。大矢君が廊下の端まで到達したとき、前川君はちょうど三組と四組の境目だった。

他のクラスから「何事？」と先生や生徒が出てきたが、四組の子どもたちは前川君を引きとめ、「何でもありません」と言って教室に入った。大矢君も頭をかきながら、「スポーツ大会の作戦を練ってまして」と言って教室に戻ってきた。そしてわずかに肩を上下させながら言った。

「五分の三だな。一周百五十メートルだから、五分の二は・・・、六十メートルは離される。六十メートルは大きいな」

また別の子が言った。

「みんながみんな大矢ほど速くはないんだし、距離が長いとどうなるか分からないぜ」

後から分かったことだが、大矢君がクラスで一番足が速く、学年でも一、二を争う。大矢君は、足が速いと言われてまんざらでもなさそうだった。

「前川をどっちに出すかはここでは決めないで、様子を見ることにしよう。前川、早速今日からジャンプと走る練習だ。それでどっちに出るか決めるからな」

前川君は体全体でうなずく。

「縄跳びは一人でもジャンプが続かないと、回数をかせげないけど、リレーだったら他の十一人で頑張れば、遅れを取り戻せるかもしれないぜ」

『大矢君、いいこと言うじゃないか。すっかりまじめなスポーツ大会のリーダーになったねえ。前川君のおかげかな？』

これからしばらくは、このクラスの動きから目が離せなくなった。

他のクラスも、この時間は同じようにリレーと縄跳びの分け方を決めているはずだ。面白そうなので行ってみることにした。

まず隣の三組、例の『女性剣士』のクラスだ。のぞくと誰もいない。『あれっ？どうしたんだろう』おいらはしばらく空っぽの教室でうろろしてしまった。ふと思いつたり、廊下へ出てグラウンドのほうを見た。いたいた。ひとクラス分の生徒と、遠目にも分かる『女性剣士』が集まってなにやら話し合っている。

何を始めるのかしばらく眺めることにした。やがて動きが始まり、その動きからやろうとしていることが分かった。女の子全員がグラウンドの端のほうで一列に並び、男の子の何人かがグラウンドの反対側で待機する。グラウンドの長辺は

百メートル近くありそうだ。いつせいに同じ条件で走って、上位六人を決めようというわけだ。早く走れない子たちは最初から無理をしなればいいし、上位に入れそうでもリレーの選手になりたくない子は、他の子を見ながらうまく走ればいい。なかなか合理的な決め方だ。

一人の男の子の合図で、二十人くらいの女の子が一斉にスタートした。ほんの数人を除いて、ほとんどの子がみな必死で走っている。これを見ると、スポーツ大会にかける子どもたちの意気込みが感じられる。それにしても上位に入る子たちは速い。人間の子どもはすごいと改めて感心させられる。

次に男の子たちが同じように一列に並び、一斉にスタートした。やはり三、四人、いかにも最初から走る気がないといった子がいるが、その他の子たちは見るからに全力で走っている。なかなかの迫力だ。先頭はあの子じゃないか。おいらがちよっかい出して危うく叱られそうになった子だ。なかなかいい走りだ、サッカーか野球でもやってるんだろう。

みんながゴールし終えた後、一人走るのをやめるとぼとぼ歩いている子がいる。小柄で、ここからはスポーツ刈りに見える髪の毛の短い子だ。ふざけているふうでもなさそうだが、何人かの男の子たちから盛んに声を掛けられ、寄ってきた二人の子から突っつかれている。何か事情がありそうだが、こんなに離れていては、さすがに神経を集中させても届かない。

選手決めが終わって、子どもたちは様々な遊びを始めた。自由に過ごせる時間になったらしい。サッカー、ドッジボール、大縄跳び。砂場で遊ぶ子もいる。『女性剣士先生』もにこやかに子どもたちの遊びを眺めている。おいらは少し安心した気分になる。

そんなのどかな光景をのんびり眺めていると、突然視界の片すみに、人の動く気配が入り込んだ。廊下の端のほうから、一人の女の子がやってくるのが見えた。女の子は教室側のすみを身をかがめて――教室の内から見られないように――、こちらに向かってやってくる。そうして三組の教室の入り口から入り込んだ。『どうしたんだろう?』女の子は、後ろの生徒たちのロッカーから一つのカバンを引っ張り出し、口を開けると、何やら手にしていた袋の中身を流し込み、また元の場所に戻した。おいらは思わず『どうしたの?』と、無音の声を発した。女の子は一瞬びくっとしたようだが、あたりに誰も居ないことを確かめると、カバンを元に戻し、先ほどと同じように身をかがめて足早に走り去ってしまった。『何をしたんだろう?』どのカバンだったかも特定できず、何をしたのかさっぱり分からなかった。ただ、よからぬことをしたのだろうということは察しがついた。このあと、子どもたちが一斉に教室へ戻ったところで、何かひと騒動起きそうだ。

気にはなりつつも次の二組へ移動した。地球儀をくるくる回していたあのクラス。教室の前のほうに女の子、後ろのほうに男の子が集まってそれぞれ何やら相談している。女の子、男の子、それぞれのやり方で決めようということのようだ。女の子の集まりはまとまっているが、男の子のほうはばらばらで、話に参加しているのはせいぜい半分の十人ほどだ。それぞれどういう決め方をしているのか分からない。女の子たちの集まりの中に・・・、そう、マルガリータは輪の一番外のほうだけど、しっかりと加わっている。背も高くひときわ目立つ存在だ。おいらはうれしくなった。あの足の長さなら、走るのも速そうだ。そして一組。このクラスはまだ話し合いの真っ最中だ。前に立っているのはあの「待ってよ」の近藤君だ。近藤君には新たなニックネームが付いていた。「マテオ」だ。『面白い子たちだなあ』近藤君自身少しも気にしていない。あれからまだわずかな時間しかたっていないのに、もうすっかり定着している。『近藤マテオ』

さて、何を問題にしているのか。このクラスは、リレーと縄跳びをトータルで考えているようである。黒板には四つのケースが書いてある。一番上はリレーが一位(六十点)で縄跳びが十五回(三十点)の合計九十点。二番目は二位(四十五点)と二十回(四十点)の八十五点。三番目は三位(三十点)と二十五回(五十点)の八十五点。最後は四位(十五点)と三十回(六十点)の七十五点。これらを基準の目安として、クラスとしてどの線を目指していくのが一番いいかを検討しているようだ。このクラスの実情と、他のクラスとの兼ね合いから、考えようというのだろう。なかなか頭を使う作戦を練っている。リレーは相手があることだけど、縄跳びはいくらでも確かめられる。

リレーと大縄跳び、メイン種目はなかなかうまくできている。どのクラスも、他のクラスの作戦が気になることだろう。ただ、どんな秘密の作戦を練ろうとも、他のクラスに漏れないなんて到底考えられない。一日として持つことはないだろう、あの小猿のような子たちでは・・・。また小猿に対して失礼な言い方をしてしまったか。

ホームルームの時間が終わり、三組の子たちがぞろぞろ戻ってきた。おいらは一足先に後ろのすみの所に隠れた。みなそれぞれロッカーから自分のカバンを取り出して席に着く。さっき隠れるようにして入ってきて、誰かのカバンに何か入れた女の子はすぐに見つかった。その子は、何かを入れたのとは違う位置のカバンを手にした。結局、何か入れられた子はその子からなかったが、このあと帰りの会でカバンを開ければ、気が付くはずだ。おいらは全体が見渡せる位置にはい上がり、どこかで発せられるであろう悲鳴を待ち構えた。まだ先生が入ってくる前で、教室全体はざわざわしている。

『女性剣士先生』が入ってくるのとほとんど同時だった。廊下側の前の方で「あっ」と言う声が上がった。だがそれは予期していたよりずっと控え目で、気が付いたのはその子の周り数人だけだった。その子はそれ以上の声も発せず、動きも見せないまま、何も無かったように収めてしまった。真ん中当たりの席の、何かを入れた女の子が後ろを振り向き、二人の女の子と意味ありげな目配せを交わした。

おいらは何かとても嫌なものを見たような気がした。その子たちの心の中を讀む気にもなれず、すごすごと教室から出て行った。

その日の放課後から、どのクラスも早速練習開始だ。四組は練習というより、今の段階は前川君の種目決めが全てだ。まずは縄跳び。跳べるようになったとしても、どれくらい連続してできるかどうか。回数は悪くても二十回、できれば三十回以上を目指したい。前川君がそうした回数を跳ぶというのは、果たして可能だろうか？努力で何とかなるものなのか。

前川君を中心とする大きな取り巻きができ、あちこちからアドバイスが飛ぶ。前川君はそのたびに声のする方に体を向け、顔をくしゃくしゃにさせてうなづく。一番熱心なのはあの『サッカーのバカ騒ぎ』の女の子だ。名前は神山さんということが分かった。この先すっかり神山さんのペースで進められていったあの大矢君も圧倒されたようで、ただ見守るばかりだ。神山さんは、「足をそろえて」「両方の足に同じように力を入れて」「膝を軽く曲げて」「両足同時に」と、自分がジャンプするのを見せながら繰り返す。前川君はジャンプする力はあるが、両方の足に均等に、しかも同時に力を入れるというのがなかなか思うようにいかない。見ていて分かったことだが、前川君は、左足の方に思うように力を伝えられないようだ。軽いマヒがあるのだろう。そのために両足の力が一つにならず、効果的なジャンプにならない。

次第に取り巻きのあきらめの雰囲気は濃くなり、数人ずつ消えていく。ここまでずっと黙って見ていた大矢君が言った。

「前川、やっぱり縄跳びは無理だな。走るしかないか」

そういう言われ方をして、前川君は相変わらずの表情で「ああ、ああ」と言っとうなづくだけだ。

「前川君、本当にリレーでいいんだね？」

メガネをかけて腕組みをした男の子、そう、あの『私学ねらい』が、ゆっくり念を押すように言った。

「ぼ・く・は・リ・レ・ー・で・い・い」

前川君が口をパクパクさせながらうなづく、前川君のリレーへの出場が決ま

った。

再び神山さんが前川君の前に立った。おいらはとっさに神山さんにメッセー
ジを送った。

『踊ってごらん、何でもいいから。前川君が楽しめるような踊り。ひよこひよ
こ跳びはねるようなやつ』おいらが踊るのを見せてあげられればいいんだけ
ど……。

すると神山さんは、おいらの意図が通じたのか、突然、阿波踊りをジャンプ
させたような奇妙な踊りを始めた。取り巻きが「何やってんだ？神山」と笑い
だす。前川君も笑う。神山さんは前川君に真似をさせようと、何も言わずに、
ただ前川君の顔を正面から見据えながら踊り続ける。前川君が踊り始めた。
『そうだ、力を抜いて、軽やかに跳びはねるんだ』おいらが加勢する。前川君
がまったく別人のように、軽やかにとまではないが、両方の膝を交互に上
下させるようになった。それで、取り巻き連中も理解した。そうか、走る練習
か。

踊りながら神山さんがバックする。前川君は踊りながら前進する。少し行っ
たところで、神山さんが脇によけ、「そのまま走って！」と叫んだ。前川君は
そのまま前進したが、走る意識に戻ったとたん、ぎごちない身のこなしになっ
てしまった。

「いいわよ、前川君。練習すれば出来そう。あとは腕の振りね。左腕は動かせ
ないんだっけ？それなら右腕でバランスをとる練習をしようよ」

『神山さん、素晴らしい』おいらが意図していた通りの練習が始まりそうだ。
神山さんの熱心さと前川君の頑張りで、六十メートルの差が五十メートルに、
いやもつと縮められるかもしれない。

次の日、おいらは例によってマルガリータのクラスをしばらくのぞいたあと、
四組の先にどうやらもうひと教室あるらしい『五組？』へ行ってみることにし
た。それで二組の窓枠から移動を始めようとしたそのとき、子どもらしき人影
が、前の入り口の向こうを、続けて後ろの入り口の向こうをすごいスピードで
通過した。「タカハター」目の前にした相手をとがめるような言い方で、何人
かの生徒がつぶやくようにささやいた。『高畑君？高畑君が走りすぎた？』あ
つげにとられていると、今度は反対の方向に向かって通過した。まさか走る練
習でもないだろう。みんながそれほど特別な驚き方をしないということは、ち
よくちよくあることなのだろうか。

おいらは五組の教室の窓枠に身をひそめて中をのぞいた。『あれ？なんだこ
れは』四組までの教室とは大違いで、室内はガラガラ状態。二個ずつくっつけ

られた八個の机で正方形が作られている。生徒が六人で先生が二人だ。年配の男の先生と、もう一人は・・・、若くて色白で、短かめのポニーテールのかわいらしい先生。おいらの目が一瞬釘付けになる。『おいらも席について輪に加わりたいな。できれば先生の正面の席で』

先生の隣の席で、肩を上下させているのが高畑君であることはすぐに分かった。丸い黒ふちのメガネを掛け、レンズの中の大きな目をきよるきよるさせている。見るからにすばしこそうだし、さっきの走りからして足は速そうだ。机の上には何やら難しそうな本が二、三冊積まれている。

高畑君の隣はやはりメガネを掛けた女の子で、高畑君とは逆にとても落ち着い感じの子だ。無口そうで、自分からは人に声をかけることはなさそうだ。

先生たちの正面の右側の女の子は、小柄で一見して朗らかそうな子だ。机の角どうしがくっついたメガネの女の子に、ちよっかいを出しては一人で楽しんでいる。メガネの女の子はいやがるふうでもなく、一緒になって笑ったりもする。だけど笑ったときに笑い声がない。

その隣の男の子は少し体が前後に揺れている。どうやら自然に動いてしまうようだ。そしてときおり右手を目の前でひらひらさせる。いったいどういう子なんだろう？

窓側の後ろの男の子は、どうしてここにいるの？という感じの子だ。四組までのどのクラスにもいそうな子だ。話し好きそうに見えるけど、このクラスに話し相手になる子はいるんだろうか？

その隣の男の子はほとんど身動きしないで、ジーツと椅子に座っている。時折先生の話の首を小さく上下させるが、話の内容にうなずいているのかどうかは分からない。それにしても窓側の二人は好対照だ。

男先生がスポーツ大会の話をしている。

「今年のスポーツ大会、このクラスは何に参加するかだけだ・・・」

「何に参加するかって、縄跳びしかないでしょ」

すかさず窓側のおしゃべりそうな男の子が言った。

「例年、五組はどこも縄跳びだけだし、全学年の五組が合体してリレーに出るといっようなのかな？」

「えーっ？」

今度は高畑君が真っ先に反応した。「どの学年に出るのさ」

「そこは高畑に計算してもらうんだよ、リレーに出るメンバーの学年の平均をとるとえば三・三だったら三年、三・八だったら四年に参加するといっようなのはどお？」

高畑君が「おー」と目を輝かせて反応し、隣のメガネの女の子も首を縦に振

っている。小柄な女の子とおしゃべりそうな男の子は、きよとんとしている。あとの二人は反応がない。

「もう一度詳しく説明するよ」

先生はそう言って、理解できてなさそうな子たちに、ゆっくり説明を繰り返した。

「それで、さっきの出場する学年の話だけだね、五組は人数が少なくて選手を選ぶなんて余地がないからさ、自らに少しおまけして、学年の平均を出すのに、一、二年は1、三、四年は3、五、六年は5で計算することにしたらどうかな？」

「うん、それがいい」

高畑君が賛同し、メガネの女の子もうなずく。おしゃべりそうな男の子は、やはり首を傾げているだけだ。ここで女の先生が口を開いた。鈴虫のような優しい声だ。

「おもしろそう。私も賛成。でも走るのが好きでない子は、無理にメンバーに入らなくてもいいわよね。岡田君ははずしてあげましょうよ。岡田君、どうお？」

岡田君が小さくうなずき、みんなも了解した。岡田君というのは、『おしゃべりマン』の隣のジーツと座っている子だ。

「他の子は、みんなリレーに参加するのに賛成なのね？」

体をゆすっている男の子はどうするのか？みんなが気にしないということは、この子は走るのが嫌いじゃないんだろう。

まずは三、四年の五組と、一、二年の五組に働きかけてみようということになった。

「今の時間はどっちのクラスもスポーツ大会の話をしているはずだから、斉木と高畑で話しに行ってみるか」

先生が言うと、斉木君——窓側の『おしゃべりマン』——と高畑君が「オツケー」「よっしゃ」と言って飛び出ていった。

二人は五分ほど帰ってきた。どちらも、報告者になることが手柄だとばかりに、すごい勢いで入ってきた。一瞬速かった高畑君が、

「三、四年も、一、二年もオツケーだよ、リレーに参加するって」

と息を切らせて言った。遅れた斉木君が、肩を大きく上下させながら言った。「俺が説明したんだからな、こいつには無理だから」

またひと騒動起きそうだとみんなが顔をしかめていると、珍しく高畑君が何事もなかったように、男先生に向かって言った。

「十二人のメンバーはどうやって決めるの？」

「上の学年から決めさせてもらおう」

「分かった。じゃあ三、四年に言ってくる。『五、六年は男三人、女二人の五人です』って」

斉木君が何か言おうとすると、高畑君が、

「お前は人数の足し算できないからな」

と言い、斉木君が今にも泣き出しそうな顔になった。

「二人とも、いい加減にきなさい」

男先生が言うと、女の子二人が「そうだ」というようにうなずいた。

「斉木、『五、六年から決めさせてください』って言いなさい。高畑は今の人数を言いなさい。二人で行っておいで」

二人がまた勢いよく出て行った。

帰りの会が終わわり、ポニーテールの先生が生徒たちを引き連れて教室から出て行った。どのクラスもみな帰り始めたようだし、おいらもそろそろ畑に帰ろうかなと思ったそのとき、思いがけない出来事が起きた。

「脇田先生！」

女の子が飛び込んできた。

「先生、大変。ちょっと来て！」

先生が「どうした」と言って飛び出していく。おいらも後を追った。三組の教室の入り口に子どもたちが何人か群がっている。先生が入っていくと、四人の男の子がいて、その向こう側で、一人の男の子が椅子を両腕で頭の上に抱えあげていた。見覚えのある子だ。そう、あの選手決めで一斉に走ったとき、最後にひとりとぼとぼ歩いていた子だ。足元が震え、今にも泣き出しそうな顔をしている。

「水島、どうした、落ち着きなさい」

『水島』と言われた男の子は、椅子をさらに高く挙げた。先生が一步踏み出したそのとき、その子は、先生の足元に椅子を投げつけた。椅子は跳ね上がり、先生の左足をかすめた。先生はさらに近寄る。

「水島、なあ、落ち着いて」

先生が静かな口調で言うと、水島君は「ワーツ」とすごい勢いで泣き出した。先生は水島君の肩に手をかけ、

「水島、五組で話をしよう」

と言った。すると、水島君はしゃくりあげながら、

「いやだ、五組には行きたくない、行きたくない」

と大声で繰り返す。

おいらは先生に向かって発信する。『水島君はこの子たちに「お前なんか五組へ行っちゃまえ」って言われたんだ』

先生は「あれっ？」といった顔をして、後ろの男の子たちのほうを振り向いた。それでも、その子たちには何も言わず、水島君の手を握る。

「水島、もう五組はだれもないからさ」

水島君は素直に先生に従った。

水島君は五組の教室へ入ると、窓の下の壁に寄りかかるように座り込んだ。

先生もその前にあぐらをかいて座り込む。

「何か言われたか？あの連中に。お前なんか五組へ行っちゃまえて？」

水島君が不思議そうな顔をする。

「前からか？」

水島君がかすかにうなずく。先生も「そうか」と言うようにうなずく。先生は黙ったまま水島君を見つめている。すると水島君の方から話し始めた。時折しゃくりあげながら話す。

「ぼくは何をやってもだめなんだ。勉強はできないし、走るのも遅いし・・・、音楽も体育も美術もみんな苦手だ」

「得意なことはないのか？」

「なんにもない」

「好きなことは？」

「ない」

また二人とも黙り込む。『水島君、何かないかい？おいらは鼻がいい』と発した。すると水島君がつかれて言った。

「目はいいよ」

「そうか、目がいいか。それはうらやましいなあ」

先生がそう言うと、水島君の目がほんの少し輝いた。

「二・〇まで良く見える」

「目がいいんだったら、水島、星を見ないか。普通の人よりたくさん星を見ることができぞ」

水島君はきよとんとしていたが、次第に先生の星の話に耳を傾けるようになった。

そのとき、『女性剣士先生』が入ってきた。

「あとと私が見ます」

そうやって水島君の手を引いて教室から出て行った。

* * * * *

私は脇田俊一、年齢は五十五歳。五、六年の五組の担任をしている。五学年の学年主任でもある。

これまでの文章はすべて私が書いたものである。と言っても私が創作したのではなく、ブン太が私に語ったことを、ほとんどそのまま文章にした。ただ書き出しの一行目は私が提案し、本人の意志で書き入れることにした。そう、ブン太と言う名前だ。ブン太は、誰からも呼ばれるはずもない名前のことなど、考えもしなかったようだが、こうして文章にまとめるには名前があった方が都合がいいし、体裁がいいと私が言うと、すんなり認めて、自分で『ブン太』と付けた。

まずはブン太と私の『出会い』から始めるが、その前に五組の生徒について、少しふれておくことにする。五組は、担任が林という若い女の先生と私の二人で、生徒は六人。この六人については、ブン太がそれぞれひと目見た印象を語っているが――なかなかの観察眼だ――、ここで少し補足しよう。

六人はどの生徒も、それぞれ少し際立った個性を持ち合わせているが、共通して言えることは、『みな持って生まれたもの』ということだ。成長していく過程で何かがあったのでは？と誤解されやすいが、そのようなことは決してない。

一人目は高畑君。五年生。いろいろな面で個性が顕著だ。好きなことに没頭すると、子どもとは思えないほどの集中力を見せ、街の図書館で、コンピュータのプログラミング関係の専門書を、片っ端から読みあさっている。ところが、そうでない場面では落ち着きを欠くことが多い。考えていることが頭の中で混乱したりすると、不意に立ち上がって、みんなの周りをぐるぐる走り出す。時には廊下を一往復してくることもある。また他の生徒との関わりでは、人の気持ちや感情を読み取ることがうまくできないことから、トラブルを起こしやすく、わがままな子と思われがちである。医師からは ADHD（注意欠陥多動性障害）と診断されている。

二人目の女の子は富田さん。六年生。学力は普通の生徒と変わらない。しかし場面緘黙（かんもく）と言って、家では家族と話すのに、一歩外へ出ると一切しゃべらなくなる。家族たちがいくら説得してもだめで、どうしてそうなのかは本人以外の誰にも分からない。自分からは何も発しないが、人の話はよく聞くし集中力もあるので、普通の生徒と同じように理解できる。五組にいるのは本人が希望したから。気が向くと通常級の授業を聞きに行くこともある。学年のどの生徒も、富田さんのことは分かっているし、教室の一番後ろで静かに座っているだけだから、何も問題にならない。

三人目は五年生の松木さん。ダウン症の生徒だ。ダウン症の子特有の陽気さがあつて、クラスのムードメーカーだ。ここぞと言うときは、クラスの雰囲気をも高めるために、言い方は良くないが彼女を大いに活用する。あまりうまくとは言えないが、自分では歌もダンスも得意だと思つてゐる。彼女が歌つたり踊つたりすると、他の生徒も面白がつて楽しい雰囲気になる。たまに何かの理由で気持ちが沈みこむと、普段とはまったく逆に動きが止まつてしまい、立ち直るのに時間を要することがある。

四人目は五年生の山下君。自閉症（現在は『自閉症スペクトラム』という言い方が一般的）の生徒だ。自分からはめつたに声を発することはないが、他人から何か言われると、ほとんど言われたとおりのことを言い返す。いわゆる『オウム返し』。自分の頭の中で予定していた動きが変えられたりすると、混乱して自分の後頭部を手のひらでパンパンたたたくことがある。いろいろな面を感じ方が人一倍繊細だが、それをうまく表現できないために、つらい思いをしてしまうことになる。

五人目は五年生の斉木君。通常の会話や行動には何も問題は無いが、数が絡むと——お金とか時間とか——、とたんに何も考えられない状態になり、会話が続けられなくなる。いわゆる LD、学習障害だ。トランプのカードを数の順番に並べるのは難しく、買ひ物が絡んだり乗り物を利用する外出は、一人ではできない。口は達者で、面白がつてよく高畑君をからかい、怒らせるが、高畑君は最近「千円でこれこれの買ひ物したらおつりはいくらか言つてみる」と反撃する手段を思いついた。二人がお互いを理解し合えるようになるといいのだが、なかなか難しい。ぶつかり合いを繰り返す中で、それぞれの成長を期待するしかない。

六人目は六年生の岡田君。いつも静かに座つてゐる。意識の半分は自身の中に留まり、外に向けられるのは残りの半分といった感じだ。何事にも動揺しないさまは子ども修行僧のよう。得意なのは絵を描くこと。特に鳥や魚の絵では、羽の一本一本、うろこの一枚一枚を細かく丁寧に描き、しかも多彩な色で塗り分ける。彼の作品には、誰もひきつけられる。会話は成り立つし、自分の気持ちや考えを発することはできるが、自分から何か言うということはまずない。

このように六人の生徒たちは、通常級の子たちから見ると、少し理解しがたい面を持ち合わせてゐる。だが、最初にも言つたように、すべて生まれつきのものではない。本人の意思や、周りの者のアドバイスなどで、簡単に何とかなるものではない。従つて、仲間として関わるときは、そのような面を理解し、つらい思いをさせないように配慮する必要がある——もつともこのことは、どの子たちの間でも言えることだが——。

生徒の話が長くなってしまった。出会いの場面に話を戻そう。

ある日の昼休み、私は教室の生徒たちに気を配りながら、教卓に座って連絡帳に目を通していた。ふと気が付くと、机の角のところにコバエがとまっている。丸くて黒い小さなうちわを二枚並べたような羽をしていて、大きさは五ミリほど。コバエにしては大きいサイズだ。給食も済んでいるし、気が付く生徒もいそうにないから、私は気にしないことにした。しばらくして目を向けるとまだそこにいた。気のせいなのか私のほうを見ているような気がした。変なコバエだなあと思いつつも、私は無視していた。

『のんびりしてるなあ』

耳からの音声ではなく、頭のどこからわいてくるような、不思議な感じがした。『あれっ?』と思ったが、それほど気にするほどのことでもないか、とあまり考えないことにした。

『のんびりしていいねえ。のどかだねえ、このクラスは』

また聞こえてきた。言われたセリフはかなりはっきりしている。語りかけられたような気がした。

『ああ、楽しいクラスだよ』

私は思わず頭の中で答えていた。周りを見回すまでもなく、私の耳元でささやく者など誰もいない。いるのは、・・・コバエだけ。やはりどこか外から、何かの信号のように頭に入ってくる。しかもかなりはっきりした音声で。かつて経験したことのないことだ。

『先生は目の前にコバエがいたとしても、たたきつぶしたりしないよね』

『ああ、つぶさないよ。食べているときだったら追っ払うけどね』

ごく自然に会話が成り立った。

『よかった。子どもが相手だと、いったたきつぶされるか分からないからね』
『ところで・・・』

と聞こうとすると、それをさえぎるように、コバエの方からいろいろ語り始めた。不思議なこともあるものだと思いつつも、正直これは面白いになりそうだと、ひそかに胸をわくわくさせた。なにしろ気が付いているのは自分だけだし、コバエと交信できるなんて、ありえないことだ。

林先生は男子生徒三人と、畑の方を眺めながら何やら語り合っている。女子の二人は例によって、身振り手振りで愉快そうにじゃれ合っている。私が、他の誰かと言葉を交わしているような顔をしているなんて、誰も気が付きそうにない。高畑君は例によって本に夢中だ。

コバエは、あるとき風に飛ばされて一組の教室に舞い込んだときのことから、あちこちの教室をのぞいてきたことなど、いろいろ話した。そして窓の方にチ

ラツと顔を向けて言った。

『ところで、あの窓のところで、子どもと話している女の人は？』

『林先生。このクラスの担任だよ。二人で担任をしているんだ。林先生がお気に入りたいんだけど、残念ながら虫がめっぽう嫌いだからね。気を付けたほうがいいよ』

『えっ、あんな色白でポニーテールの先生が？』

『色白とかポニーテールとかは関係ない。嫌いなものは嫌い。多分君を見つけたら「脇田先生、早くこの気持ち悪いコバエ叩きつぶして」って叫ぶだろうね』

『えーっ、そんな』

コバエは相当ショックだったようだ。ちよつとからかいすぎたか。コバエは振り返って林先生の方を見ている。と、そのとき、突然高畑君が立ち上がり、突進してきた。右腕を高く掲げ、その先に丸めた雑誌を握りしめている。

『ブン太、逃げる！』

雑誌が振り下ろされ、机をたたく大きな音を発した。ブン太はそれより一瞬早く飛びのいた。教室中の全員が「何事か？」とこちらに注目している。

『くわばら、くわばら。油断禁物だ！』

ブン太は窓枠に止まってこちらを見ている。

『またおいで、ただし給食が終わってからだよ』

高畑君が、再び右腕を振り上げながら窓枠めがけて突進する。みんなの視線がそれを追う。

『それじゃあね、先生』

ブン太は軽やかに舞い上がり、視界から消えていった。

(ブン太が高畑君におそわれそうになったこの場面。『ブン太』という呼び方で書いたが、もちろんまだこの出会いの時点では名前は無かった。私は恐らく『コバエ、逃げる！』と叫んでいたのだろう)

この日以降、ブン太はほぼ毎日のように姿を見せるようになった。どうやらこの教室へ来る前に、他の教室をひと通りのぞいてくるらしい。何組でこんなことがあったよ、何組ではこんな授業をしていたよ、と私に報告する。我々は少し離れていても十分に通信が成り立つので、ブン太は、林先生と高畑君には見つかりにくい、安全な場所に身を潜める。

ブン太は、このクラスの音楽と美術の時間が気に入ったようだ。音楽といえど松木さんだ。かわいらしい声を張り上げ、体全体で歌う。いいよというと喜んで踊りだす。他の子も歌ったり体を動かしたりするが、みんな思いのままだ。一人高畑君は、口をもぞもぞさせながら、真剣な顔で壁かどこかを見つめてい

る。そして、ときどきみんなの周りを一周する。頭の中は何かのプログラムがぐるぐる巡っているらしい。ブン太の警戒すべき二人は、一人がキーボードの演奏に専念し、もう一人は頭ぐるぐるの状態なので、音楽好きな上にリラックスできて、羽を十分伸ばせるのだろう。

岡田君が描く色彩豊かな絵には、ブン太も目を奪われるようで、背後の窓枠から覗き込もうとするが、正面に高畑君がいる。高畑君が考え事をしているときは、視界を固定し、動くものに敏感になるだろうから要注意だ。

山下君が描く人は、顔は丸くて大きい円だが、首から下は、グローブのような手とコップパンのような足以外はすべて棒だ。円の中には、道端で見かける地蔵のような、やさしい”（の目と、）”の口があり、たくさん人の絵が描かれると、見ているほうが笑顔になる。

ここからはまたブン太の語りに戻そうと思う。私が書く文章より味があるから。だがその前に二、三補足しよう。

結局、四組の前川君はリレーに出ることになったのだが、このことで一つ面白い展開が見られた。ブン太と無音のやり取りをした一人、ゲーム漬の荒井君だが、前川君が縄跳びに入らなかつたおかげで、自身が一番足を引っ張る存在になってしまった。みんなからののしられ、励まされ、自分からは他の子と関わるのを避けていたのが、いやおうなしに他から頻繁に関わられることになってしまった。「毎日練習だからな、休むなよ」とおどされつつも、次第に笑顔も見られるようになって、なんだかんだ学校へ来るのが楽しそうな表情も見られるようになった。その後も足を縄に引っ掛けてしまうのは、荒井君が一番多かったと聞いているが。

全学年の五組が合体してリレーに参加することを発案したのは私だ。以前から考えていたことだが、走るのに前向きな生徒が全学年で男女六名ずつ、十二名集まるかが問題で、今までは言い出だせなかつた。このクラスの生徒たちは、もともと岡田君を除いて走るのが嫌いではない。高畑君と斉木君はかなり速いし、女子の二人も速くはないが、走るとなると一生懸命走る。山下君はゆっくりだが、右手をひらひらさせ、ニコニコしながら走る。四年生以下の学年にも、活発な子が多く見られるようになったというところで、提案することにした。

もう一つ、ブン太が私に報告した中であつた、三組の女子生徒たちの「いじめ」の目撃談。このことに関しては最後のところでふれようと思う。

* * * * *

スポーツ大会当日、おいらは——弁当と水筒をさげると言いたいところだが、コバエがそんなもの抱えて飛んでいたら目立ってしまう——身軽に体一つで、小学校のグラウンドに向かった。午前の部がすでに始まっていた。おいらはどが一番の特等席かグラウンド中を見渡し、本用に張られたテントの真ん中の屋根に陣取った。どう考えたってこれほどの特等席はない。このときばかりはコバエであることに誇りを感じ、人間どもの上に立った気分になる。

向こう側の第二コーナーから第三コーナーにかけてが生徒席で、それよりこちら側が一般席だ。生徒席は左から一組の緑色、二組の青色、真ん中に五組のピンク色、三組の赤色、四組の白色で、全員がそれぞれの色のはちまきをしている。ピンク色は小さな集団だ。

後ろを振り向くと、二階の教室の窓に大きな得点板が貼られている。縦に組名と色、横に午前の部の種目名と午後の部の種目名、そして合計点と順位を書き込む枠がある。真ん中の五組は、縄跳びの枠と、今年初めて特別参加することになったリレーの枠がある。午前の部の五組は、それぞれ適当な色に分かれて参加するようだ。

そしてこの得点板には無いが、どの種目も学年ごとにクラス対抗で競うことにもなる。各学年で競い合い、同時に全学年の色でも競う。なかなか面白い仕組みじゃないか。

人間は競技好きのようで、やるほうはもちろんだが、観るほうもけっこう楽しんでる。運動会のような華やかさはないが、立ち見ができるほどの客だ。それだけに、やるほうの子どもたちも一段と一生けん命になる。午前の部は、男の子の綱引きと女の子の綱取り——この二種目はトーナメント——、そして全員のボール送りが、それぞれクラス対抗で一学年から六学年の順番で組まれている。四色の対抗戦でもあるから、どの学年のどの競技も、全体で大変な騒ぎだ。

そしてお昼。生徒たちもお客も一斉にお弁当を広げる。えっ、おいらの昼ごはんはどうしたかって？それはもう語るのをよそう。人間様にはおぞましく感じられるだけだろうからな。

午後の部が始まった。まずは一年の大縄跳び。リレーに出ない子が全員で跳ぶとあって、どのクラスもなかなかうまく跳べない。運動の苦手な子がこのクラスにもいて当たり前、多く跳べなくて当たり前の、和気あいあいとした雰囲気だ。やっている方も観る方も、失敗するごとに笑いが起きる。『なかなかいいじゃないか・・・ハハハ』

リレーに出場しない五組の残りの子たちは、全員で三年生の部で登場した。二人の先生が縄を回し、残りの先生も生徒に混じって一緒に跳ぶ。続けて跳ぶ

のは難しく、跳んだ回数合計が点になった。十二回の二十四点だった。

四年生ぐらいから様子が変わってきた。子どもたちの顔つきが違っている。明らかに回数を競う顔だ。つかえる子が同じだったりすると、その本人がつかうような顔になる。それでも励まし合う。得意そうな子が苦手そうな子の手を取っているペアもある。なかなかいい光景だ。これこそ世の中の人間関係の縮図じゃないか。この子たちは、横断歩道で困っているお年寄りがいれば、手を差し出してあげるに違いない。

さて五年生の番だ。一組から四組までが正面を向いて横一線に並んだ。「ヨイ、ハジメ」の合図で一斉に跳び始める。最初はどこも数回で失敗する。前川君をリレーに回した四組がいきなり十五回跳んだ。ゲーム少年の荒井君も、目の前の子だけを見て必死にジャンプを繰り返している。二回目に二十回を超えた。他のクラスも調子に乗り始め、十回を超えるようになった。一分を超えると、どのクラスも回し手が疲れ始め、跳ぶほうも余裕がなくなってリズムが狂い、回数が伸びない。結局、四組の二十九回が最高で、他のクラスは一組が十九回、二組が二十三回、三組が十七回だった。

そしていよいよ最後のリレー。なんとと言ってもこれが見ている一番楽しめる。おいらは腕を組んで座りなおした——見た目では分からないだろうけど、人間で言えばそうなる——。

一、二年は男の子も女の子も半周ずつだ。それにしてもすごい盛り上がり方だ。生徒席は勿論、一般席も大変な騒ぎだ。バトンを渡し損ねて落としてしまうなどまだかわいい。走る順番を間違えて引き戻されたり、バトンを渡す相手を間違えそうになったり。一年生のリレーは笑えるシーンがいくつもあった。本人たちは一生けん命だからよけいにおかしい。

全学年で合体したピンクの五組は、四年のレースに参加した。学年の平均——高畑君が計算したはずの——が三・五以上四・五未満に収まったということだ。三、四年は女の子が半周で男の子が一周だ。このあとの五、六年は女子も一周だが、松木さんと富田さんは、四年に合わせて半周を走る。

いよいよスタート。二年生の子がいたり、足の運びが思い通りに行かない子もいたり、五組は最初から離されてしまった。五、六番手の松木さん、富田さんまで回ってきたときには、前の四チームは半周先を走っている。それでも二人は、何とかそれ以上差を広げられないで男子につながった。男子は五、六年の三人と四年の三人。期待できそうなのは高畑君とアンカーの斉木君だ。高畑君にバトンが渡ったときには、トップの子——四年一組のアンカー——が、もうすぐ後ろに迫っていた。目指す四位の子はすでに四分の三走り終えている。高畑君はなかなか速い。後ろの一組との差を少しずつ広げていく。すごい歓声

だ。「五組！五組！」みな五組に声援を送っている。高畑君の感動的な走りに、おいらも夢中で声援を送る。『あらっ！』最終コーナーを回るあたりから、高畑君の足の運びが少しずつ怪しくなってきた。最初から目いっぱい飛ばしすぎたのだろう。少し差を広げたはずのトップの子が次第に迫っていく。「五組、がんばれ！」の声援がますます高まる中、高畑君が最後の力を振り絞って、待ち構える斉木君を目指す。そしてバトンを渡す直前に、四年一組のアンカーに抜かれてしまった。一位がゴールし、五組は一周遅れとなった。アンカーの斉木君が第二コーナーに差し掛かるころには、四チームすべてがゴールし、斉木君の一人旅になってしまった。斉木君は会場全体の声援を受けながら、一人黙々と全力で走り続けた。ゴールし終えた後もしばらく拍手が鳴り止まなかった。

レースが終わったあと、選手たちの間で、一人こぶしを地面に打ち付けてくやしがつている子がいる。高畑君だ。最後の最後に抜かれたことが悔しくて怒っている？あまりの大差でビリになったのが悔しくて怒っている？誰もがそう思ったに違いない。だが彼の心が読めるおいらには本当の理由が分かった。

『五組の十二人の学年の合計があと1小さければ、平均は三・五未満で三年のレースに出ていたはずだ。なんでもう1減らさなかったんだ』

『分かったぞ。合計が四十二だったのだ。十二で割るとちょうど三・五。合計が四十一なら、平均は三・五より小さくなって、三年に出ていたはずだ。高畑君、これだけ声援を受けたんだから、よかったじゃないか。みんな五組の走りに感動してたよ。他の走った子たちもみんな満足そうだよ』

どうやら高畑君は、自分の関心のあることにしか意識を向けられないようだ。いよいよ五年生のレースだ。選手たちが全員スタート地点に集まった。四組の列を見ると、男の子の四番目に前川君がいる。その次の五番目が浦野君。そうか、浦野君は足も速いのか。そしてアンカーは大矢君だ。

第一走者がスタートラインにしゃがみ号砲を待つ。あぐらでもかいてゆったり楽しむつもりでいたのに、何故だか緊張して手足に力が入る。今までより一段と大きな破裂音が響き渡り、スターターの頭上に白煙が舞い上がった。四人の女の子が一斉に走り出す。白いはちまきの子が先頭に立つ。四組の女の子だ。とても軽快な走り。明らかに足の運びが他の三人とは異なる。向こう正面に入り顔が見えた。なんだ、あの子じゃないか。前川君に『踊り走り』を教えている女の子、『サツカーのバカ騒ぎ』の女の子、そう神山さんだ。最終コーナーを走り終えるころには二番手以降を七、八メートル引き離れた。おいらは思わず立ち上がる。『そうだ、白、いいぞ。離せ、離せ、五十メートル引き離せ！』

結局十メートルほどの差をつけて第二走者に引き継いだ。第二走者も第三走者も十メートルの差をほぼキープしてつないだが、第五走者で少し詰められた。そして女子の最終第六走者にバトンが渡った。四組、三組、一組の順で走り出す。最後の二組、『マルガリータだ』おいらの目はマルガリータに釘付けになる。速い。すらっとした長いカモシカのような褐色の足。空中を駆けるようだ。観客席から驚きの歓声があがる。十メートルほどあった一組との差があつという間に縮まる。最後の直線に入るあたりでついに一組をとらえた。そしてバトンを渡す時点では、二位の三組にもう少しというところまで迫っていた。おいらの目は走り終えたマルガリータから離れない。膝を抱えるように座り、肩で息をしながら他の子たちとニコニコしながら語り合っている。おいらはすぐにも近くへ飛んでいきたい気分をぐっと抑えた。

レースに目を戻すと、男子の第一走者の先頭は、すでに向こう正面を走り終えて第三コーナーに差し掛かるあたりにいた。トップの四組は二位に十メートル以上の差をつけている。

結局第三走者までで、四組は二番手の三組に十五メートルほどの差をつけた状態で、第四走者の前川君にバトンが渡った。四番手の一組とは三十メートルくらいの差がついている。

前川君が走り出した。それまでと違った、どよめきに似た歓声が会場全体に湧き上がった。前川君は、笑いるときとは違ったくしゃくしゃ顔で、力強く走る。左足の運びが不自然で、見ているものの呼吸が乱れてしまいそうだ。左手を脇腹に抱え、右手を左右に大きく振り回す。練習の成果だろう、廊下を走ったときは別人のようだ。

前川君が第二コーナーに入り、四組の応援席の前に差し掛かったとき、「ゴウガイ！ゴウガイ！」の大声が誰かの口から発せられた。それは誰の目にも一瞬にして分かるものだった。左腕に号外の束を抱え右手でまく。スマートでない走りも、重い束を抱えた人のようだ。合唱が、四組から期せずして他の組の応援席にもまんえんし、さらにはグラウンド全体の人たちを巻き込んだの大合唱となった。

「ゴウガイ！」「ゴウガイ！」

おいらも力いっぱい叫ぶ。『ゴウガイ！ゴウガイ！』

前川君は二番手に抜かれ、三番手にもあっさり抜かれ、最終コーナーあたりで四番手にも抜かれて、次の浦野君にバトンを渡すときには、三番手の一組に十メートルの差をつけられていた。浦野君は必死で一組を追うがなかなか差がつかまらない。それでも後半頑張つて、アンカーの大矢君にバトンを渡したときには、一組との差は七メートルほどになった。

いよいよ四組のアンカー大矢君が走り始めた。確かに速い。大矢君は前との差を少しずつ詰めていく。大矢君が向こう正面の中央に差し掛かったときには、目の前の三位との差は三、四メートルほどになった。一位の三組、二位の二組は最終コーナーを回って最後の直線に入った。

一組のアンカーは見覚えのある子だ。そうだ、あの近藤君だ。担任の先生と待つ待たないでやりあった近藤マテオ君だ。近藤君も応援したい気になる。第四コーナーに差し掛かったあたりで、両者の差は二メートルほどになった。一位、二位はすでに決まっている。会場全体の声援がこの二人に送られている。大変な騒ぎだ。最後のゴール間近になって、大矢君の足の運びが少し鈍ってきた。最初からあまりにも全力で飛ばしすぎたせいか。近藤君も必死だがやはり疲れが見える。わずかずつ差が縮まる。両者が並んだかに思われた最後の最後、大矢君の足がわずかにもつれた。両者が倒れ込むよにゴールラインを走り抜けたが、ほんの一瞬一組の方が早かった。走り終えた直後に二人とも倒れ込む。会場全体から大きな歓声と拍手が鳴り響く。おいらも拍手を送り続けた。

四組の帰りのホームルーム。おいらは、一番後ろの大矢君の椅子に張り付いていた。四組の白組は総合で三位だった。

「俺が最後までつこけなければな」

確かに、総合で二位との差はわずかだったようだ。大矢君が頭をかきながら照れるように言ったが、みんな笑い顔で満足そうだ。前川君もつられて頭をかきながら、くしゃくしゃの顔をしている。

担任の三田先生が話を終わりにかけたとき、廊下に人の気配を見つけたようで、出て行った。三田先生は誰かと話をしているようだが、なかなか戻らなかった。気の早い子が何人かそわそわし始めている。やがて三田先生が戻って、みんなに向かって言った。

「前川君のお母さんが、みんなに話したいことがあるとおっしゃってるんだけど、どうかな？」

みんながあっけにとられていると、三田先生は、了解が得られたというように、前川君のお母さんを招き入れた。前川君のお母さんは、前川君には悪いけど全く似てなくて、上品ですらっとしていて、女優さんにでもなりそうな女性だった。みんな圧倒されてポケツとしている。

「ゴウガイの母です」

くすくす笑い声が起きる。

「大事なホームルームの時間にごめんなさいね。でもどうしても皆さんにお話ししたくて。先生には帰りの会が終わってからで結構ですから、と話したんで

すが、終わったたらもうたちまちばらばらになりますから、と言われてまして・・・」

三田先生に促されてお母さんが続けた。

「クラスの勝利を優先して考えたなら、うちの子みたいのは、いないほうがいいに決まっていますよね。そう考えるのがごく普通だと思います。クラスのことを考えたなら、うちの子は当日休んじゃえばいいのにつて。でも皆さんは違いました。ハンデを負ったうちの子を、なんとかみんなでカバーしようとしてくださった」

突然、目の前の大矢君が立ち上がって言った。

「前川君のおかあさん、正直に言うとうそではないんです。俺はクラスが勝つことしか考えてませんでした。だから前川君を縄跳びにするかリレーにするか、クラスにとつてどっちがいいかって、それしか考えてませんでした」

すると、浦野君が立ち上がって言った。

「おかあさん、今回一番頑張ったのは前川君自身だと思います。みんなから励まされはしましたが、いろんなことも言われました。でもへこたれないで、いつも笑顔で頑張っていました。僕だったら投げ出していたと思います。それから、大矢君がクラスのことしか考えなかったなんて言い方をしましたが、実は心の底の方で、いつも前川君のことを思う気持ちがあったと思います。大矢君に限らずみんなそうだったと思います。それが本当のやさしさだと思います」

教室中がしーんとなった。いつも顔をくしゃくしゃにする前川君も下を向いている。突然、三田先生が窓際へ駆け寄り、広げた両腕を窓枠につっぱってうなだれている。どうした？とあちこちざわつき始めた。三田先生が振り返った。目をしばたかせ、口をきゅつと結んでいる。

「終わりにしましょう。日直さん、号令」

号令が掛かり、みんな一斉に飛び出していく。

三田先生は窓の外に体を向けたままだ。前川君のお母さんがそっと歩み寄る。おいらも二人の元に近づいた。

「いい子たちですね」

「はい。でも、いい子でないこともたくさんあるんですよ」

三田先生は時折小さくしゃくりあげながら、必死で普段の顔を取り戻そうとしている。

「あのメガネを掛けた男の子、浦野君ですか？本当のやさしさに気付かされました。世の中のすべての人に、本当のやさしさがあるって信じたいですね」

三田先生がまた下を向く。下を向いた三田先生の両目から涙が、頬を伝うのではなく、真下にポタポタ落ちた。前川君のお母さんも両目を赤くし、涙をに

じませている。おいらも思わずもらい泣きしてしまう。『えっ、ユバエが泣くかって？ユバエのおいらにだって涙くらいはある！……。他の連中はどうか知らないがね』

『それにしても学校っていいなあ。おいらも人間の子に生まれて、学校に行きたかった』

* * * * *

ブン太があこがれた学校、確かに多くの生徒たちにとって素晴らしいところではある。ブン太もいろいろ見聞きする中で、楽しい経験をすることができたようだ。しかし残念ながら、素晴らしく感じられない生徒もいるし、さらには学校へ行くことを拒むようになる生徒——いわゆる不登校——もいるというのが現実だ。学校として、一人の教師として、もっとも心が痛み頭を悩ませる問題だ。

それから「いじめ」の問題。ブン太がたまたま三組で目撃した、あの一件もその一つだ。何かを入れた子、入れられた子、それと目配せの二人。この四人の女子生徒たちは、この学年がスタートしてからずっと仲良しの四人組だった。特に入れた生徒と入れられた生徒は、もっとずっと以前から仲良しの関係だった。それがどうして今回のようなことになったか。本当のところは、あの生徒たちから話を聞き出せない限り分かりようがないが、一つ原因として考えられるのは、入れられた生徒がつい最近、市の作文コンクールで賞を受けたことだ。入れたほうの生徒も応募していたが落選だった。いつもは仲良しそうなグループでも、ほんのちよつとしたことから、いじめられる側にもいじめる側にもなりうる。今までにもそういう例はいくつかあった。

この件に関しては、ブン太はずいぶんショックだったようで、『どうして、ああなるのかなあ』『どうしたらいいんだろうね』としきりに私に問いかけた。しかし残念ながら、私にはうまい説明ができない。ただ私が思うに、あの生徒たちの間で生じたものは、決して根が深いものではないから、例えばあの四人が、今回のスポーツ大会における四組の一員だったら、何事もないままだったのではないか。ほんのちよつとしたトラブルと言うのは、その程度のものだと思っている。

それから水島君の一件。あのとときブン太が関わっていたのは、勿論後から分かったことだ。ブン太のおかげで、水島君が『五組へ行ってしまえ』と言われていたことを知ったのだし、水島君が自分から『目がいい』と言い出すきっかけにもなった。水島君はあれ以来、昼休みに五組の教室に星の本を見に来るよ

うになった。水島君が自分から五組に来るようになったので、『五組へ行つてしまえ』と言つていた生徒たちも何も言わなくなつた。自分たちの愚かさに気付いたのならいいが。水島君はいつか私のふるさと——信州の山奥——へ、星を見に行きたいと言つている。彼が行くときには、ぜひ私も付き合わせてもらおうと思つている。星空の観望が実は私の趣味だから。

ブン太の語りの最後となつたスポーツ大会の一日。四組の帰りの会での話を聞いていて、ブン太同様、私ももらい泣きをしてしまった。前川君に関してはいろいろあつたから。

そもそも前川君がどうして四組にいるのか、五組にいてしかるべきではないか。ブン太の語りの中には、このことが一度も出てこなかつた。四組の生徒たちが一度も口にしなかつたということだ。人間誰しも、大人でも子どもでも、良い心もあれば良くない心もある。四組の生徒たちの誰もが、心のどこかで、『前川君がなんで四組にいるんだ』と一度は思つたに違いない。それでも、みんなでカバーし合うんだという心の方が勝つた。

前川君が五組に入らなかつたというのは、母親の強い気持ちがあつたからだ。前川君をどうして通常級に入れるのか？生徒たちも親御さんたちも多くの教師たちも、誰もがそう思うに違いない。そのことを一番意識されたのは前川君のお母さんのはずだ。でもお母さんは、『我が子のことしか考えない、なんて身勝手な母親』と陰口をたたかれるであろうと思いつつも、信念を通された。

前川君のお母さんは、自分の子どものことしか考えなかつたわけではない。口にも出さないが、ハンデを負つた子をみんな理解し合い、みんなで当たり前にカバーし合う、そんな学校になれたらいい、そんな世の中になれたらいいと考えられたのだ。

こんなことを語る自分が、なんで五組の担任をしているのか。私は本当のことを言えば、五組なんて作らない方がいいと考えている。ただ、今の学校のままで無理に五組をなくせば、いろいろ問題が生じるであろうことは目に見えている。五組をなくすためには、まずは学校がそれなりの環境を整える必要がある。教師を増やすこともそのひとつ。そしてみんなの意識を高めるのが、何より大事なことだ。そうしたことがかなわないうちは、急ぐわけにはいかない。

話をブン太のことに戻そう。残念ながら、ブン太が大好きだつたマルガリータは、今となつてもブン太の存在にはまつたく気付いていない。ブン太にとつては、ある意味そのほうが幸せだつたと言えるだろう。

マルガリータに限らず、私以外の誰一人として、ブン太の存在に気付いていない者はいない。いつか私が誰かに「突然変異で生まれたコバエがいて

ね・・・」などと話しても、「何ねごと言ってるの？先生」と笑い飛ばされるのが落ちだろう。

はたしてブン太は、私がまとめたこの文章を読む機会があるだろうか。コバエの寿命はたった一ヶ月ほどと聞く。ブン太がこの学校に興味を持ってやってくるようになって、もう一ヶ月になる。超突然変異で生まれたようだが、寿命がどれほどなのかは聞いていなし、本人も分かっていたかどうか——何しろ前例がないだろうから——。毎日のようにやってきたのに、もう姿を見せなくなって三日がたつ。どうしてるのかな？どこかまた別の興味深い場所を見つけて、通い始めたのならないが。

イチゴの季節はもう少し先だ。ブン太は、はたして楽しみにしていたイチゴのなる季節まで、生き延びることができのだろうか。